国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」

文法研究班 「名詞修飾構文の対照研究」 平成 28 年度 第 2 回研究発表会
2016 年 11 月 19 日 於 名古屋大学

日本語の相対名詞連体修飾の統語的特性について

大島資生（首都大学東京）
moshimatg@gmail.com

1. はじめに

従来の日本語学において、日本語の連体修飾節に関しては大きく二つに分類することが行なわれている（分類をめぐる議論については、加藤(2003)、大島(2010)を参照）。一つは被修飾名詞を修飾節内部に復元することができる「内の関係」、もう一つは復元することができない「外の関係」である。

(1) a. 太郎が読んだ本 → 太郎が本を読んだ（内の関係）
b. 太郎が本を読んだ事実 → ×（外の関係）
c. パレードが進んでいくあとを子どもたちがついていった → ×（外の関係）

「外の関係」はさらにいくつかのタイプに下位分類できる。主なものの一つは(1b)のように修飾節が被修飾名詞の内容を示すもの（寺村(1977)などでは「内容補充の関係」と呼ばれている）であり、もう一つは(1c)のように、相対的な時間・空間的関係を示す「相対名詞」（奥津(1974)）が被修飾名詞となっているものである。

本発表では、「外の関係」のうち、後者の「相対名詞」を修飾するものを取り上げる。そして、このタイプの修飾節の統語的特性、特にテンス・アスペクトを取り上げ、さらに「内容補充の関係」との差異、また「外の関係」と「内の関係」との差異を観察・検討する。

2. 先行研究

まず、これらの時間・空間を表わす相対名詞を中心とする連体修飾構造の解釈について従来の論考を振り返っておきたい（以下、本節の内容は大島(2010)pp.21～26 による。なお、当箇所の記述は、Kuroda(1983)を参考にしている）。

相対名詞を修飾する節構造の意味解釈については、従来次の三つの方法が提案されている。

一つは、國廣(1980)によるもので、次の文の「森がうっそうと茂る」は b のように「表現されていない語」を修飾しているとする。「時」を表わす相対名詞についても同様である。

(2) a.　ぼくは［森がうっそうと茂る］中をひとり散歩した。
　　b.　ぼくは［森がうっそうと茂る(場所)］（の）中をひとり散歩した。

(3) a.　［ぼくが東京についた］あとで
　　b.　［ぼくが東京についた(時)］（の）あとで

つまり、「場所」「時」といった「表現されない」head を想定するのである（pp.274～276）。ところが、Kuroda(1983)が"Headed Relative Analysis"と呼ぶこの方法によると、次の(4a)については(4b)のように表現されない「場所」という head を想定することになる。その基底構造は(4c)のようになるという。

(4) a.　ぼくはそこのところに森が茂る中を…（Kuroda(ibid.)　p.96）
　　b.　ぼくは［そこのところに森が茂る(場所)］（の）中を…
　　c.　［［そこのところに］Place $_{Ad}$　［場所に］Place $_{Ad}$　森がうっそうと茂る］

(4c)には二つの場所補語が現れている。一つの文に二つの場所補語が現れる場合、次のように、一方がより広い場所、他方がより限定された場所を表すのが自然である。

(5)　あの山のふもとにはお宮の後ろに森が茂っている。

だが(4c)の二つの場所補語は、その広狭の関係が不明確であり、この方法では(4c)のような例を処理できない。
　第二の方法は Kuroda(1983)、Kuroda(1975～76)(1976～77）が提唱する"Headless Relative Analysis"である。これによれば、(6a)においては「森」が"semantic head"であって、「うっそうと茂る」という節をうけているのだと考える。

(6) a.　［森がうっそうと茂る］中を
　　b.　［うっそうと茂る］森の中を

(6a)は(6b)と同義であるとする。しかし、この方法では、(7a)については(7b)のような許容されない構造を作ることとなる。

(7) a.　［ぼくが東京に着いた］あとで
　　b. ＊［東京に着いた］ぼくのあとで（國廣(1980)　p.272）

つまり、時間的関係を表わす相対名詞には、この方法を適用することができない。

Kuroda(1983)もこの欠点を認め、時間的関係を表わす相対名詞については次の第三の方法を採用している。ところが、空間的関係を表わす相対名詞を"Headless Relative Analysis"で考えた際も、次のような問題がある。

(8)　大勢の先生が大勢の生徒を引き連れて歩いている中を…

（Kuroda(1983)　p.100）

(8)では、「大勢の先生」と「大勢の生徒」を合わせたものが"semantic head"になると考えられる。逆に言えば(8)は head が分断されている。このような例を"Headless Relative Analysis"で扱うためには、きわめて複雑な解釈規則を考えなければならない。

第三の方法は、中右(1980)のものである。次の二文を比較してみよう。

(9) a.　ぼくは［うっそうと茂る森］の中をひとり散歩した。
　　b.　ぼくは［森がうっそうと茂る］中をひとり散歩した。（中右(1980)　p.150）

中右(1980)は次のように述べる。

> a.においてその空間詞「中」が取り結んでいるのは二つの物体「ぼく」と「森」であるのに対し、b.において「中」が取り結んでいるのは、二つの命題表現、よって二つの事態である。つまり「ぼくがひとり散歩する」行為と、「森がうっそうと茂る」状態とが相対的な位置づけを与えられているといわなければならない。(p.150)

Kuroda(1983)によれば、(9b)のような表現は、次のような、英語の独立法（Absolutive)にあたるという。

(10) There being a dense forest, I took a lonely walk.　（Kuroda(1983)　p.94)

そこで、Kuroda(1983)は中右(1980)の分析を"Absolutive Analysis"と呼んでいる。中右(1980)の議論の要点は、相対名詞が二つの命題をつなぐ役割を果たしているということである。この方法によれば「時」の相対名詞についても、"Headless Relative Analysis"のような欠点はなく、たとえば(11)は(12)のように解釈される。

(11)　［ぼくが東京に着いた］あとで地震が起きた。
(12)　「ぼくが東京に着いた」という事態と「地震が起きた」という事態は、この順序で生じた。

「あと」は、二つの事態が生起する時間的順序を示す「つなぎ目」としてとらえられることになる。また、"Headless Relative Analysis"では複雑な解釈規則が必要になる(8)の例も、この"Absolutive Analysis"によれば、「大勢の先生が大勢の生徒を引き連れて歩いている」事態と主文（「…」）の表わす事態とが「中」によって相対的に位置づけられていると解釈するので、分断された head の問題は生じない。

以上見てきた限りにおいては、中右(1980)の"Absolutive Analysis"に従うのが最も穏当であると考えられる。

3. 考察

3.1. 「とき」を主名詞とする連体修飾節

「前」「あと」など相対名詞を考えるための準備として、まず、次の例を考えたい。

(13)　警備員が金庫室を午前 0 時ごろ見回ったときには、何の異状もなかった。

この文では、「見回ったとき」がすなわち「午前 0 時ごろ」、あるいはその前後の時間帯を表わすというのが直観的な解釈だと思われる。しかし、それをもってこの構造を内の関係と言うことはできるだろうか。たしかに、「警備員が見回ったとき」であれば、いわゆる内の関係と捉えて「警備員がそのとき見回った」のように解釈することができるように思われる。しかし、同様にして先の例を解釈する際、次のような文を想定することとなる。

(14)　そのとき、警備員が金庫室を午前 0 時ごろ見回った。

この文の「そのとき」は、「その当時」「（何回も見回るうちの）その回」などの意味に解釈される。細かい差ではあるが、「「とき」すなわち「午前 0 時ごろ」」とも解釈できる(13)とは意味合いが異なっている。むしろ、(13)の「とき」を修飾する節は内の関係ではなく、「とき」は、「警備員が金庫室を見回る」という事態の成立時点を含めた「状況・場面」といったものを表わすと考えるべきだろう。そして「とき」は、文全体の解釈において修飾節事態と主節事態との間の時間的関係を表現すると考えられる。

「とき」が次のような用法をもつことが、このことの一つの傍証となるかもしれない。

(15)　もし体調が悪くなった｛とき／場合｝は、すぐに係の人に言ってください。

(15)はやや口語的ではあるが、「もし」と共起できるところから、この「（修飾節）とき」は条件節に近い意味合いを持つとみることができる。この点で「場合」と類似している。このような「(修飾節)とき」は、いわば修飾節事態を中心とした状況をさすといえよう。

さて、「とき」を「場合」に近いものと考えることは、「(修飾節)とき」という構造を、内

の関係ではなく、外の関係と捉えるべきだということになる。 「とき」は修飾節事態と主節事態の間の時間的な関係を表わしており、「アメリカに行くとき／行ったとき」のように、修飾節と主節の意味的関係によって、それぞれの時間関係を表わすことができる。「とき」のとる事態の成立時点は、最初から指定されているわけではなく、「とき」が後接することによって事態から取り出されると考えることとなる。こうすれば、(13)（「警備員が金庫室を午前 0 時ごろ見回ったときには、何の異状もなかった。」）では、結果的に「～とき」全体の表わす時点は「午前 0 時ごろ」でもありうるが、状況によってはもう少し時間的な幅があるということになり、直観に近い解釈が得られる。

3.2. 時間的関係を表わす相対名詞

「前」「あと」などについても、2.1.で考えた「とき」と同様の捉え方が根底にあると考える。次の例で考えよう。

(16) a. 警備員が金庫室を午前 0 時ごろ見回る前には、何の異状もなかった。
b. 警備員が金庫室を午前 0 時ごろ見回ったあとで、賊が侵入した。

従来の論考では、「前／あと」などのとる修飾節は、基準となる時点をもともと含んでいるとされていた（奥津(1974)など）。そのように考えるならば、表現されていない基準時点が存在することとなる。したがって、上の文に対して、次のような意味的構造を想定しなければならない。

(17) 警備員が金庫室を午前 0 時ごろ見回るときの前には、何の異状もなかった。

この構造は、3.1.で検討した「とき」と同様の問題点をはらんでいる。(16)のような例に対しては 2 で述べた通り、中右(1980)の方法が最も適当である。3.1.で「とき」について検討したのと同様に、修飾節部分は修飾節事態を中心とした状況や場面を表わすと考える。そして、相対名詞が後接することによって修飾節事態から生起時点が取り出されるとみるべきだろう。その時点を基準としてそれよりも「前／後」という時間的前後関係が表示され、文全体としては修飾節事態の場面と主節事態の場面との間の時間的な関係を表わすと考えることになる。

3.3. 空間的関係を表わす相対名詞

上で時間的関係を表わす名詞類について検討したのと同様のことが、空間的関係を表わす名詞類にも当てはまる。

(18) a. たくさんの車が行きかうすぐわきで子どもたちが遊んでいる。

b. たくさんの車が国道を行きかうすぐわきで子どもたちが遊んでいる。

(18a)は、直観的には(18a')のように解釈できるように思われる。

(18) a'. たくさんの車が行きかう（場所）のすぐわき

つまり、表現されていない「場所」のような名詞が存在しているという解釈である。そして、(18a')の「たくさんの車が行きかう（場所）　」という部分からは次の(18a'')のような文が復元される。

(18) a''. たくさんの車がその場所で行きかう

これと同様に考えると、(18b)からは次の(18b')のような文が復元されることになる。

(18) b'. *たくさんの車が国道をその場所で行きかう

しかし、(18b')は不自然であり、3.1.および 3.2.で検討した時間的関係を示すものと同様の問題がある。

ここで、このような場所を表わす名詞の性質について、少し考えてみたい。

(19) a. (以前にした旅行のことを思い出して)
あのとき、君が京都で財布を落とした｛ところ／場所｝はどこだったかな。
b. 今朝は、山のふもとに小さな祠が立っている｛ところ／場所｝まで散歩した。
c. 警察は、吉川さんが会社の建物の中で倒れていた｛ところ／場所｝を調べた。

上のような例は、やや不安定ながら可能であろう。「ところ」「場所」を修飾する節が内の関係だとすると、次のような文がもとになっているということになる。

(20) a. 吉川さんが会社の建物の中で倒れていた場所
b. ??吉川さんが会社の建物の中でその場所で倒れていた

(20b)では、「その場所」「会社の建物の中」と、位置を表わす補語が二つあらわれている。二者の間に、「会社の建物の中」(広）–「その場所」(狭）という広狭関係を想定することは可能だが、それでもこの文は不自然である。また、二者間の意味的関係を解釈するためにどのような過程を想定すればよいのかも、不明である。

場所を表す補語に関しては、「ところ」より具体的なものも同じような振る舞いが見られ

る。

(21) a. 君が京都で扇子を買った店はどこだったかな。
　　b. ??君が京都でその店で扇子を買った

(21a)を内の関係と考えると、その元になると考えられる(21b)は、非常に奇妙な文となる。このように、場所を表す要素一般が、単純な格成分とは振る舞いを異にしており、状況を表す要素として機能していると考えるべきだろう。

　ところで、こういった例に対しては、(20b)(21b)のように補語が並列された文ではなく、次のような「A の B」の構造が元になるのではないか、とも考えられよう。しかし一般に、「A の B」構造からは「A」を被修飾名詞にすることはできるが、「B」を被修飾名詞とした文は不自然になる。

(22) a. 太郎が本のページを破った
　　b. 太郎がページを破った本はどこだったかな。
　　c. *太郎が本を破ったページはどこだったかな。

(23) a. ネズミが猫のしっぽにかみついた。
　　b. ネズミがしっぽにかみついた猫はどれかな。
　　c. *ネズミが猫にかみついたしっぽはどれかな。

一方、場所を表す名詞類では、語彙を調整すれば「A の B」の A と B をどちらも被修飾名詞にした文を作ることができる。この点で一般の名詞と異なる。

(24) a. 田中さんがその町の店で扇子を買った。
　　b. 田中さんが店で扇子を買った町はどこだったかな。
　　c. 田中さんがその町で扇子を買った店はどこだったかな。

時間を表わす名詞についても同様のことが言える。

(25) a. 田中さんがその年のある月に海外旅行をした。
　　b. 田中さんがある月に海外旅行をした年はいつだったかな。
　　c. 田中さんがその年に海外旅行をした月はいつだったかな。

　このように、「町」「店」「年」「月」など空間・時間に関わる名詞は、それ以外の名詞とは異なる性質を持つことがわかる。

以上のことから、「ところ」「場所」などを修飾する節は、「とき」の場合と同様に内の関係ではなく、外の関係と考える可能性がある。すなわち、これらの名詞は、単に事象の成立する物理的位置を示すのではなく、「とき」と類似して、その事象を中心に広がる状況や場面をさすとみることができよう。この点は、上でみた「町」「店」、さらに「年」「月」など、空間・時間に関わる、より具体的な名詞についても同様である。そして、「わき」「上」など空間的関係を表わす相対名詞が修飾節をとる場合も、外の関係が内在していると考えられる。したがって、空間的な場合も、相対名詞が修飾節に後接することによって、基準となる地点が取り出される。それに基づいて主名詞である相対名詞が修飾節事態と主節事態の位置関係を表わす、と考えることができる。

なお、一般に時間的表現は空間的表現を下敷きにしたものが多い（「遠い昔」「近い将来」など）。一方、「ところ」は「ところだ」という形式で時間的な局面を表わすことができる。こういった現象は、「とき」「ところ」が意味的に近接していることを表わしているとみることができる。そして、これらを主名詞とする連体修飾節構造が、単なる時点や地点ではなく、当該事態を中心とする状況や場面を表わすことの傍証となるのではないだろうか。

4. 相対名詞連体修飾節におけるテンス・アスペクト

ここでは前節での考察を踏まえながら、相対名詞を主名詞とする連体修飾構造のテンス・アスペクトを取り上げて検討したい。

「とき」を始め、「前」「あと」などの名詞類が、状況や場面を示す機能を持つとすると、この名詞類がとる節のテンス・アスペクトはどう考えればよいだろうか。

文全体の表わす事象が過去のことがらであっても、未来のことがらであっても、「前」を修飾する修飾節の述語はル形、「あと」はタ形をとるのが標準的な形式である。そして、開始、終了などの時点が特定される事態でなければならない（田窪(2012)）。次の例からわかるとおり、「前」「あと」などの相対名詞を修飾する節では、開始や終了の時点が特定されない事態、具体的には状態など等質の状況の持続を表わす表現をとりにくい。

(26) a. *ドルが高い前に、買っておこう。
　　b. *田中さんが勉強している前に、テレビを見た。

これらの修飾節は、テンス上は主節時視点に固定されている。そして、節述語のアスペクトには、上述のとおり開始・終了の時点が明らかであることという制約がある。

次に、空間的関係を表わす場合についてはどうだろうか。テンス的には、時間的なものと同様に主節時基準ではないかと考えられる。空間的な関係を表わす相対名詞に関しては、大島(2010)で指摘したとおり、修飾節事態と主節事態とが同時的でなければならないという制約がある。その観察が正しければ、アスペクトについて制約があると言うべきだろう。次の例を検討しよう。

(27) a. 特急が通過｛する／した｝すぐわきで爆発がおきた。
b. シャトルが着陸｛する／した｝1 キロ北に飛行機が不時着した。
(28) a. ??特急が 5 分後に通過するすぐわきで爆発がおきた。
b. ??シャトルが 1 時間後に着陸する 1 キロ北に飛行機が不時着した。
(29) a. 特急が 5 分前に通過したすぐわきで爆発がおきた。
b. シャトルが 1 時間前に着陸した 1 キロ北に飛行機が不時着した。
(30) a. 特急が 5 分後に通過することになっているすぐわきで爆発がおきた。
b. シャトルが 1 時間後に着陸することになっている 1 キロ北に飛行機が不時着した。
（(27)～(30)は大島(2010) pp.20～21 より）

空間的位置関係は基本的に静的なものとしてとらえられるのではないか。というのは、空間において相対的な位置づけを定める際、基準は動かないものとして捉えなければならないからである。修飾節事態・主節事態が動的なものである場合も、位置関係を規定する場合は、瞬間的にであっても静的に捉えるのではないか。こういった事情により、このタイプの相対名詞がとる修飾節のテンスは主節時基準に固定される。

上の(28)が不自然に感じられるのは、2 つの事象が時間的に切り離され、同時に成立しないことが明確になっているためだろう。それに対して(30)のほうが自然なのは、「ことになっている」という形式により、修飾節事態が主節事態と同時に存在しうる状況に転換されているためだと考えられる。

3.3.で述べた通り、空間的関係を表わす相対名詞は、当該事態を中心とする場面や状況を表わすと考えることができる。(27)～(30)にみられる現象も、相対名詞のこのような機能とかかわっているとみることができる。

5. おわりに

以上考えてきたとおり、「とき」や「ところ」は、一見内の関係を形成するように見えるが、内の関係とはとらえにくい構造を作ることもできる。そこで、むしろ外の関係、中でも内容補充の関係ととらえたほうが整合性がとれると考えられる。そして、「とき」「ところ」と同様、いわゆる相対名詞がとる連体修飾節も、当該事態を中心とする場面や状況を表わすと考えられる。ということは、相対名詞も、根底において内容補充の関係を蔵しているとみることができる。以上の考察が正しければ、外の関係の多くの場合に内容補充の関係が根底にあるということになる。

発表者は、内容補充の関係を形成できるか否かは、名詞の語彙的情報によると考えている（大島(2010)）。すなわち、当該の名詞が、何らかの命題的な内容と対応する語彙的情報をもつか否かということである。たとえば「事実」という名詞であれば、概略次のような語彙的情報をもっていると考えられる。

(31)　<ある命題が真である>

そして「ある命題」の部分が節によって供給されるのが内容補充の関係だと考えることとなる。また、この情報の中には、節述語をはじめとして節の形式についての制約なども含まれている。たとえば「事実」の修飾節には「であろう」といった要素は入りにくい、などである（そのほか、節が主語をとれるか否かなど）。

(32) ??その代議士が不正選挙に関わったであろう（という）事実

上述の、外の関係は内容補充の関係にあるものが多いという考えを推し進めるならば、日本語における名詞修飾節の大きな区分は、被修飾名詞のもつ語彙的情報による、ということにつながるだろう。すなわち―ごく粗い言い方ではあるが―、「修飾節＋名詞」という構造において、修飾節（特に述語）が中心（内の関係）か、名詞が中心（外の関係）か、という区分を考えることとなる。この道筋の妥当性については、さらに検討の余地がある。今後の課題としたい。

〔参考文献〕

大島資生(2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房
奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店
加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
國廣哲彌(1980)「編者補説」國廣(編)(1980)所収 pp.267～276
――――(編)(1980)『日英比較講座第 2 巻　文法』大修館書店
田窪行則(2012)「時間の前後関係としての日本語テンス・アスペクト」
『日本語文法』12-2 pp.65～77
中右実(1980)「テンス、アスペクトの比較」國廣(編)(1980)所収　pp.101～155
寺村秀夫(1977)「連体修飾のシンタクスと意味(3)」『日本語 日本文化』 6,
大阪外国語大学研究留学生別科　pp.1～35
寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ｉ』くろしお出版　所収

Kuroda, Shigeyuki (1975-6) “Pivot-independent relativization in Japanese II”
Papers in Japanese Linguistics Vol.4. pp.85-96.
――――(1976-7)”Pivot-Independent Relativization in Japanese III: Types of Japanese Relatives”, *Papers in Japanese Linguistics* Vol.5, pp.157-179
――――(1983) "A Remark on Certain Constraints with the Word Naka in Japanese" in Inoue et.al.(eds.) *Issues in Syntax and Semantics; Festschrift for Masatake Muraki*　Sansyusya pp. 93-100